外国語教育メディア学会(LET)
第78回 （2011年度秋期）中部支部研究大会

プログラム

日時： 2011年11月26日（土） 10:20-17:30
会場： 立命館大学びわこ・くさつキャンパス(BKC)
エポック立命21（セミナーハウス）
〒525-8577 滋賀県草津市野路東１丁目1-1

主催：外国語教育メディア学会(LET)中部支部

問い合わせ先：
〒487-8501　春日井市松本町1200
中部大学　語学センター
外国語教育メディア学会中部支部事務局　小栗成子
電話：0568-51-6649
メール：支部サイト(http://LET.lang.nagoya-u.ac.jp)の「お問い合わせ」

日程

10:00　受付　エポック立命21 ロビー
10:00　展示　エポック立命21 ロビー/K310

10:20　開会行事　エポックホール

司会：　佐藤 雄大（名古屋大学）
主催者挨拶：　尾関 修治（LET中部支部支部長／名古屋大学）
開催校挨拶：　Michael Shawback
（立命館大学言語教育センター副センター長）

10:30-12:30　講演　エポックホール

「テストデータを分析する：古典的テスト理論・項目反応理論・潜在ランク理論による学力評価」

講師：　荘島 宏二郎（ 大学入試センター研究開発部）
講師紹介：　杉野 直樹（立命館大学）

テストデータを分析して、そのテストのスペックや統計学的な性質を明らかにすることは重要です。同時に、各受検者の能力を評価することは、教育測定において重要な作業です。そのような目的でテストデータを分析したり、テストを経年的に運用したりする枠組みをテスト理論と言います。テスト理論は、コンピュータ上でテストを行うe-testingやweb-testingの背景理論でもあります。テスト理論としては、具体的に、古典的テスト理論、項目反応理論、潜在ランク理論の３つが提案されており、それぞれ、用いる目的やシーンが異なっています。本発表では、３つのテスト理論を用いて、どのようにテストの性質を明らかにして、どのように受検者を評価するのかについて概説します。また、３つの理論を実行するためのソフトウェアの実演を行います。

12:30-14:00　昼食・展示

14:00-15:40　研究発表　K304/K305

(1) 14:00-14:30　(2) 14:35-15:05　(3) 15:10-15:40
＜第１室＞　K304
司会：草薙 邦広 (名古屋大学大学院生)
城野 博志 (三重県立四日市南高等学校)

(1) 「テキストにおける共起傾向の偏りが学習者のコロケーションの処理に影響するか―コーパスの統計的指標とフレーズ認知課題を用いて―」
草薙 邦広 (名古屋大学大学院生)

(2) 「日本語母語英語学習者は動詞下位範疇化情報の処理が自動化されているか―視線計測装置を用いた実験の報告―」

坂東 貴夫 (名古屋大学大学院生)
梁 志鋭 (名古屋大学大学院生)
草薙 邦広 (名古屋大学大学院生)
福田 純也 (名古屋大学大学院生)
杉浦 正利 (名古屋大学)

(3) 「初級英語学習者における文法形態素の処理方法と負荷の関係」
城野 博志 (三重県立四日市南高等学校)

＜第２室＞　K305
司会：石川 有香 (名古屋工業大学)
小栗 成子 (中部大学)

(1)「工学系ESP教育に向けた準専門語彙の辞書開発」
石川 有香 (名古屋工業大学)

(2) 「Using a Database of Easy-to-read Stories」
Douglas Jarrell (名古屋女子大学)

(3) 「クラウドサービスの特性を活かした英語学習プロセスの共有と協調的学習の促進」
小栗 成子 (中部大学)

16:00-17:30　シンポジウム　エポックホール

「メディアを活用した英語プロソディ習得の研究―現状と今後の展開」

コーディネータ・パネリスト：
鈴木 薫（名古屋学芸大学短期大学部）
パネリスト：伊庭 緑（甲南大学）
村尾 玲美（名古屋大学）

音声によるコミュニケーション能力の向上において、英語のプロソディ習得は重要な要因となる。しかし日本の英語教育では、プロソディに焦点を当てた指導法が十分に確立されていないのが現状である。

本シンポジウムでは、メディアを活用した実験調査に取り組んでいる3名のパネリストが、それぞれの研究について報告する。

はじめに、英語音声学習における順序について、母音・子音などの単音を学習した後にフレーズや文章でプロソディを学習すべきか、それともプロソディから学習すべきか、または両方を同時に学習すべきかについて検証した学習実験の結果を報告する。次に、心的辞書内の語彙表象と入力音声を照合させる際、日本人英語学習者はプロソディを信号として利用できるか、またどのような項目や構造において照合が可能かについて、英語母語話者と比較した結果について報告する。最後に、体感音響振動（ボディソニック）を利用した音調核認識の研究を聴覚障がい者に応用した実験調査について報告し、健聴者データとの比較検討をする。

これらの研究結果の相違点を明らかにし、英語プロソディ教育とメディアの活用法について討議し、将来の方向性を探る。

17:45-19:15　懇親会

研究発表概要

＜第１室＞

発表１　テキストにおける共起傾向の偏りが学習者のコロケーションの処理に影響するか
―コーパスの統計的指標とフレーズ認知課題を用いて―

草薙 邦広 (名古屋大学大学院生)

第二言語のコロケーションの研究では、学習者のコロケーションの処理に影響を及ぼす要因として、2語の結びつきの強さが検討されてきた。しかしながら、コロケーションの中には順行と逆行で遷移確率が大きく違うなどという特徴的な共起傾向を持つものがあることは知られており、このようなコロケーションでは、各語間の心理的連想関係に強弱の差があると論じている研究もある。本研究では基礎的な試みとして、英語の名詞and名詞フレーズを取り上げ、テキスト中の共起傾向の偏りと項目の提示順序がコロケーションの処理時間に影響を及ぼす要因になるかを検証した。

材料は、BNCから遷移確率の差に基づいた指標を用いて抽出し、共起傾向に偏りのない項目、偏りのある項目を20個ずつ選定した。実験では、24名の比較的高熟達度の英語学習者に、偏りのない／偏りのある項目毎に正順序／逆順序で提示するフレーズ認知課題を行い、反応時間を計測した。

2×2のANOVAの結果では、どちらの項目も順序間で平均反応時間（偏りなし・正順 1212ms.; 偏りなし・逆順　1266ms.; 偏りあり・正順1331ms.; 偏りあり・逆順　1343ms.）の差が有意ではなく、高熟達度の学習者でも共起傾向の偏りといった情報には鈍感であると考えられる。発表では、他の要因の影響、教育的示唆なども検討する。

発表２　日本語母語英語学習者は動詞下位範疇化情報の処理が自動化されているか―視線計測装置を用いた実験の報告―

坂東 貴夫 (名古屋大学大学院生)
梁 志鋭 (名古屋大学大学院生)
草薙 邦広 (名古屋大学大学院生)
福田 純也 (名古屋大学大学院生)
杉浦 正利 (名古屋大学)

日本語を母語とする英語学習者の動詞下位範疇化情報の処理が自動化されているのかを調査するため、視線計測装置(EyeLink1000)を用いて、英文処理時の視線の移動過程を記録した。自己ペース読み課題で同様の実験を行ったJiang (2007)を参考に、下例のようなto不定詞の選択等に関する誤りを含む文と誤りを含まない文を用いた。

例. The teacher insisted*/wanted the student to start all over again.

分析では16名分のデータを基に、誤りを含む場合と含まない場合を比較して、知識の自動化を示唆する注視時間等の違いが認められるかを検証した。結果として、誤りと判断できる語(to)を含む領域において、総注視時間に統計的な有意差が認められた(1137ms. vs. 990ms.; $t(15) = 3.78$, $p = .002$)が、初回注視継続時間では有意差は認められなかった(707ms. vs. 663ms.; $t(15) = 1.85$, $p = .084$)。発表では、総注視時間と初回注視継続時間が、外国語学習者にとってどのような性質を持つデータであるかという検討を通して英文処理の自動化について議論する。

発表３　初級英語学習者における文法形態素の処理方法と負荷の関係
城野 博志 (三重県立四日市南高等学校)

Silva and Clahsen (2008) によれば母語話者は不規則動詞の過去形をメンタルレキシコン内に丸ごと (whole-word) 貯蔵し、処理に際してはレキシコンから直接検索する。一方、規則動詞の過去形は語幹と接辞から構成される形態素表象として貯蔵され、その処理においてはその形態素情報が活用されていると考える。一方、第二言語学習者の規則動詞過去形の処理に関して母語話者とは異なった結果が出ている。Silva (2009) は英語の規則動詞を用いた語彙性判断課題において頻度効果が第二言語学習者には見られたことから、第二言語学習者は規則動詞の過去形を語幹と接辞から構成される形態素表象として記憶しているのではなく、全体として語彙記憶に貯蔵している傾向が強いことが示唆している。

本発表での語彙性判断課題の結果においても同様の頻度効果が確認された。すなわち、今回の実験協力者である初級英語学習者は規則動詞の過去形を語幹と接辞から構成される形態素表象として記憶しているのではなく、語彙を全体として記憶していることと考えられる。

規則動詞過去形の処理負荷と語彙性判断課題における上位語と下位語の反応時間差の相関を調べてみると、有意な弱い正の相関 (r=.38*) が確認された。つまり、処理負荷が大きければ大きいほど、上位語と下位語の反応時間差が大きい。時制の変化の処理コストが高いのは、規則動詞の過去形が語幹と接辞から構成される形態素表象を活性化できずに、過去形全体としての語彙記憶からその意味を検索している度合いが高いことと関連していることがうかがわれる。処理コストの低い被験者はターゲット語を処理する際に形態素表象のうちの接辞情報のみを活用して意味にアクセスして過去形か現在形かを判断していることが考えられる。一方処理コストが高い被験者は過去形全体から現在形か過去形かの判別処理をしていることが推測できる。

＜第２室＞

発表１　工学系ESP教育に向けた準専門語彙の辞書開発
石川 有香 (名古屋工業大学)

工学系大学における英語のニーズ調査を行った先行研究では、研究室配属後の学部上級生や大学院学生、担当教員の間で、論文を読む力が求められていることが明らかにされている（小山, 2001）。そのため、工学系ESP教育では、専門課程へ進む前の学生を対象とした共通教育の英語教育においても、論文テキストにおける高頻度語彙を指導する意義は大きい。これらの語彙群は、高校英語教科書では取り扱われていないものが多く、高校までの語彙力と研究室で期待される語彙力が乖離しているためである。専門が定まっていない低学年の学生を対象とした場合、専門語彙よりも、将来、どの研究室でも必要となる語彙群（準専門語彙）の指導が適切であろう。本研究では、レンジを利用してコーパスを分析し、準専門語彙を抽出している。さらに、コーパスより定義を決定し、工学系準専門語彙辞書を作成している。また、授業外に自主学習が行えるように、それらの一部をe-learningシステムに組み込んだ。

発表２　Using a Database of Easy-to-read Stories
Douglas Jarrell (名古屋女子大学)

The presenter has created a database of over 1000 stories from a daily email magazine for English learners and teachers. The stories are approximately 80 words in length and are basically restricted to vocabulary and grammar known to Japanese high schools students. Organized by topic, date, and grammatical function, these stories can be selected according

to the needs of the user. The passages are also dated according to their date of publication, allowing users to find out what was happening at a certain time in the past. A separate search window allows searches for both single words and multi-word chunks. This presentation will discuss a series of quests that were used to teach university students how to explore the various aspects of the database.

発表３　クラウドサービスの特性を活かした英語学習プロセスの共有と協調的学習の促進
小栗 成子 (中部大学)

発表者は2011年4月よりGoogleのクラウドサービス「Googleドキュメント」を利用することで、授業時間内外での学習プロセスの共有を図っている。対象は(1)情報収集・整理・英文でのまとめを作成するプロジェクト型授業と、(2)リーディングの授業である。(1)は情報収集から情報整理、まとめの英作文の各段階で、学習プロセスを教授者がモニターし添削指導を行ったものである。(2)は学習者同士がペアまたはグループワーク形態でweb上の時事ニュースを読み、サマリーを書く際、Googleドキュメント上での共同作業を行ったものである。

本発表では、教授者と学習者が1対1でドキュメントを共有した形式と、複数人またはクラス全員がドキュメントを共有した形式の２つの事例をあげ、このようなクラウドサービスの特性の中の何をどのように利用することで、個別学習が活性化され、ペア・グループワークにおける協調的学習が促進され得るか、その方向性を探る。

大会参加のご案内

■会員の方の参加費は無料です。非会員の方は参加費1,000円を受付でお支払い下さい。
■LET会員として入会手続きをしていただきますと、当日参加費から無料になります。また会員は、LET全国研究大会、支部研究大会での研究発表、紀要への投稿などができます。

中部支部紀要原稿受け付け中！
発行予定：2012年３月末
原稿締め切り：2012年１月10日

査読のある論文誌です。
執筆には事前申し込みが必要です。
詳しくは中部支部サイトで。

第79回（2012年度春季）
支部大会
2012年5月26日（予定）
名古屋学芸大学短期大学部
研究発表受け付け：3月25日から
4月22日まで（予定）
詳しくは中部支部サイトで。

第52回全国研究大会
2012年８月６日～８日
甲南大学

詳しくは本部サイト www.j-let.org で。

LET中部支部Webサイト：http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/